人権啓発推進指導員のコーナー

「ジェンダー平等」を考えてみる

近所に住む長女宅では、共働きで子ども２人を育てている。平日は、父親が学童保育、母親が保育園に迎えに行き、その後、夕食準備・お風呂・寝かせつけと協力して行っている。保育士をしている次女からは、第一子の誕生に合わせ、連れ合いが「男性の育児休業」を申請し会社も承認した、と報告があった。出産日から３か月プラス後半にも３か月、１歳になるまで分割して取得するという。周りを見ても、若い世代での男性の家事・育児参加が当たり前になりつつあるが、働き方や暮らし方に課題を抱えている人も少なくない。

厚生労働省の調査によると、2020年度の男性の育児休業取得率は12.65％。前年が7.48％だったため、増加はしているがそれでも低い数字だ。これは、「男は仕事」「女は家庭」という旧来の性別役割分担の価値観が、いまだに社会全体に残っていることを示している。企業側の理解不足により、男性が育休を申し出ても上司らが妨げるケースがあるという。女性が産後うつになるリスクが最も高いと言われるのが出産直後から１か月。せめてこの時期を共に乗り越えられたら、その後の夫婦関係や育児に大きな影響があるだろう。

男性育休制度は今年改正されている。一歩を踏み出す「パパ」と後押しをする「職場」が増えることで、日本の働き方改革とジェンダー平等とが同時に進むのかもしれない。

（北村）

映画『プラン75』を観て

高齢者の増え過ぎで国の財政が圧迫される社会を描いた映画『プラン75』を観た。

若者が高齢者を襲撃する事件をきっかけに、政府は75歳以上を対象にした、死を選べる制度〈プラン75〉をつくる。高齢を理由に清掃の仕事を解雇された主人公のミチ（倍賞千恵子）は、住む場所も失いかけて、ついにはそのプランを申し込んでしまう。

スクリーンに映し出される〈プラン75〉を勧めるテレビCM、淡々と申請手続きを進める市役所職員、死の直前までの世話をする笑顔のサポートスタッフ等、ミチを取り巻くそれぞれのシーンに、何とも言いようのない虚しさを感じた。同時に、生きづらい人をつくり続けている権力や社会に対する怒りのようなものも、じわじわと込み上げてきた。

６年前の障がい者施設殺傷事件。被告が裁判中に述べた「意思疎通の取れない障がい者は社会にとって迷惑、社会の役に立つと思った」という衝撃的な言葉を思い起こした。今でも「ホームレスの命なんてどうでもいい」のように、役に立たない人間は生きている価値がない、と主張する人がたくさんいる。　映画を観終わって、私たちの未来が、そのような人たちに主導される社会になりはしないか、不安な気持ちになってしまった。

命は、何よりも大切だ。人間は、誰もが人間らしく生きる権利を持っているのだ。

〈プラン75〉のような弱者を排除する制度を生み出す社会をつくってはならない。

（大戸）

ココロンセンター　ライブラリー　新刊紹介！

人権問題に関する書籍、まんが、絵本、DVD を入荷しました。貸出を行っています。ぜひ、ご利用ください。

DVD「映像で学ぶジェンダー入門　③結婚・家庭におけるジェンダー④労働とジェンダー」（各 35 分）

制作：サンエデュケーショナル　※字幕・副音声付き

２本とも、職場での人権研修に役立つ内容です。内容を紹介します。

③結婚・家庭におけるジェンダー

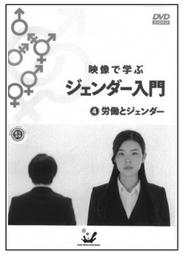
全部で４つのセクションで構成されています。

「ジェンダーに基づいた結婚制度に縛られない社会へ」「夫婦同氏（同姓）制について考える」「ジェンダーにとらわれない家事の役割分担に向けて」「出産や子育てにおけるジェンダー」を通して、「選択的夫婦別姓制度」や「イクメンプロジェクト」を取り上げ、男性の育児休暇取得促進等についても解説しています。

④労働とジェンダー

全部で５つのセクションで構成されています。

「＃KuToo運動を考える」、「マタニティハラスメントについて考える」「男女雇用機会均等法」「性別による賃金格差」「性別職務分離（ジェンダー・セグリゲーション）」を通して、なぜ、日本はＧ７の中で、男女の賃金格差が最も多いのか、女性の管理職の割合が低いのかが、事例を通して解き明かされます。



人権擁護委員が表彰されました

多年にわたって人権擁護活動に御尽力いただいた下記人権擁護委員の方が、令和４年５月27日(金)、福岡県人権擁護委員連合会総会の日をもって表彰を受けられました。

福岡法務局長表彰　　横田文子（よこた ふみこ）　様（南区）

「ココロンセンターだより」No.89　　発行：令和4年9月　福岡市人権啓発センター

〒810-0073 福岡市中央区舞鶴2丁目5番1号健康づくりサポートセンター(あいれふ)8階　TEL092(717)1237 FAX092(724)5162
E-mail:jinkenkeihatsu.CAB@city.fukuoka.lg.jp
ココロンセンター 福岡　検索
TEL092(717)1247(人権啓発相談室では人権問題に関する相談を受け付けています)

法務省委託事業

令和４年９月（秋季号）No.89 福岡市人権啓発センター

ココロンセンターだより No 89

CONTENTS「主な内容」

■ハートフルフェスタ（西鉄ホール）……1P
■ハートフルフェスタ（ゼファ会場・あいれふ）……2P
■校区人権尊重推進協議会の紹介……3P
■人権啓発推進指導員のコーナー、おすすめ作品の紹介……4P

人権啓発フェスティバル

ハートフルフェスタ福岡 2022

10月23日(日)入場無料　つながる心、ひろがる笑顔。

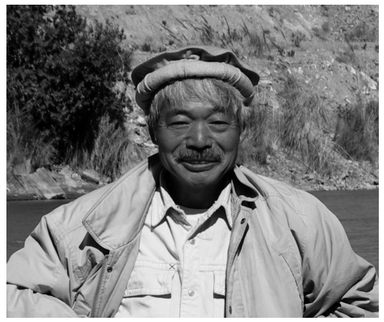
西鉄ホール会場（ソラリアステージ６F）　事前申込制、手話通訳・要約筆記有（※映画上映は除く）

1部　映画上映

10：30～12：30

「荒野に希望の灯をともす」

アフガニスタンとパキスタンで、病や貧困に苦しむ人々に寄り添い続けた、医師・中村哲の生き方を追ったドキュメンタリー。



中村　哲さん

1946 年福岡県生まれ。1984 年からパキスタン人やアフガン難民のハンセン病治療を始める。1989 年よりアフガニスタンへ活動を拡げ、2000 年からアフガニスタンで農村復興のため大がかりな灌漑事業に携わる。

ミニトークも開催！

中村哲さんと共に現地での活動経験のある

元ワーカー　**川口　拓真さん**

2部　講　演　会

14：00～15：30（オンライン配信有）

テーマ「紛争地、被災地の声を写真で伝える」

認定 NPO 法人 Dialogue for People 副代表

フォトジャーナリスト　安田　菜津紀さん

認定 NPO 法人 Dialogue for People（ダイアローグフォーピープル／D4P）フォトジャーナリスト。同団体の副代表。東南アジア、中東、アフリカ、日本国内で難民や貧困、災害の取材を進める。東日本大震災以降は陸前高田市を中心に、被災地を記録し続けている。

ゼファ会場（ソラリアプラザ1F）11:00～17:00　10月23日（日）入場無料

●安田菜津紀　写真展

紛争地や被災地など国内外で取材を続ける安田菜津紀さんの作品を展示します。

●中村哲　活動写真展

医師・中村哲さんの活動を紹介する写真展を開催します。アフガニスタンの民族衣装も併せて展示。

●パラスポーツ　ボッチャ体験コーナー

パラリンピック正式種目のボッチャを楽しく体験してみよう！

ヨーロッパで生まれた重度脳性麻痺者もしくは同程度の四肢重度機能障がい者のために考案されたスポーツで、パラリンピックの正式種目である「ボッチャ」。

老若男女、障がいのあるなしにかかわらず、すべての人が一緒に競い合い、楽しむことができます。この機会にぜひ、体験してみませんか？【協力：福岡ボッチャ協会】

●【JICA九州】ワークショップ

民族衣装体験

子どもから大人まで約25ヶ国のさまざまな衣装を着て、世界を体験しよう！

世界の国旗で缶バッチづくり

誰でもできる簡単でかわいい缶バッチを一緒に作りましょう！

●活動紹介　様々な活動を映像とパネルで紹介しています。（五十音順）

① アジア女性センター
② 福岡いのちの電話
③ 福岡県いのちを守る会
④ 福岡県人権研究所
⑤ 福岡市企業同和問題推進協議会
⑥ 福岡手話の会
⑦ 福岡人権擁護委員協議会
⑧ 福岡PHP夢塾
⑨ gid.jp 日本性同一性障害と共に生きる人々の会九州支部
⑩ SOS子どもの村JAPAN

あいれふ10F講堂（福岡市中央区舞鶴2丁目5番1号）　10月22日（土）入場無料

●人権に関する団体主催の講演会開催

10：30 ～ 12：00 ／語りの会「ことのは」『物語の中の人権』語りとおはなしの会
13：30 ～ 15：00 ／はかたいのちを大切にする会『胎児は社会の一員です』
15：30 ～ 17：00 ／福岡市ろうあ協会『SDGs で心のバリアフリー
～きこえない人の人権について考えよう～』

【主催】ハートフルフェスタ実行委員会（NPO 法人福岡市障害者関係団体協議会／公益財団法人福岡よかトピア国際交流財団／公益社団法人福岡市老人クラブ連合会／福岡市七区男女共同参画協議会／福岡市民生委員児童委員協議会／福岡人権擁護委員協議会／ハートフルフェスタ福岡企画委員会／福岡市法務局／福岡市）

【お問い合わせ・事務局】福岡市人権啓発センター　TEL：092-717-1237　FAX：092-724-5162

詳しくは、9月15日以降に人権啓発センターのホームページに掲載予定です。
『ハートフル2022　福岡』で検索！！

「この街の空襲」語り継ぐ責任～「ウクライナ」に重ねて

簀子人権尊重推進協議会

マンションやオフィスビルに囲まれた中央区大手門３丁目の簀子公園。その一角に、「戦災死者供養塔」と刻まれた石碑が立っています。一帯は77年前の昭和20年６月19日、米軍Ｂ29爆撃機の空襲で焼け野原となり、簀子地区だけで176人の命が奪われました。近くの福岡城趾に陸軍施設があったことから、集中的に狙われたそうです。

この供養塔の前で今年も、簀子人権尊重推進協議会は自治連合会や公民館などと追悼慰霊祭を催し、地元の舞鶴小中学校の子どもたちが千羽鶴を捧げました。1000人を超える死者・行方不明者を出した「6.19福岡大空襲」で、この街の戦禍を後世にどう伝えていくか。人尊協に課せられたテーマです。

■25人の証言をDVDに

戦災死者供養塔の前に立つ：
遠藤さん、太田さん、上原さん（左から）

供養塔の真後のフェンス越しに、空襲で焼け残った簀子小学校の赤レンガ塀（高さ1.3㍍、長さ90㍍）が現存します。簀子小は2014年に舞鶴小に統合されましたが、「戦争遺跡」として赤レンガ塀が残されたことなどから、空襲を風化させないよう体験談を記録するDVDを制作することにしました。

公民館だよりなどで証言者を募り、市外在住者を含む計25人に協力をいただきました。長時間に及ぶ証言は、幅広く活用しやすいように30分のDVD「火の雨が降った」に収録しました。

証言者の一人、樋口泰助さんは当時６歳でした。焼夷弾が直撃した防空壕で祖母、母、３人の姉妹を亡くし、５人の遺体を載せた大八車を父に促されて後ろから押して簀子小校庭まで運びました。その時、母のかっぽう着にくるまれていたものがあり、父に尋ねると、防空壕で生まれたばかりのもう一人の妹だったそうです。「６人の命を背負って生きてきた」という樋口さんの証言の重みは、どんなに言葉を積み上げても足りません。

■「もっと深く、もっと分かりやすく」

朗読劇をする地域住民

樋口さんたちの証言は３年前、朗読劇「福岡大空襲の夜（簀子編）」として公民館で披露しました。出演者はもちろん、脚本も住民が書き下ろし、防空頭巾やもんぺなどの衣装を手作りし、舞台の背景画は小中学生が描きました。

「もっと深く、もっと分かりやすく」。DVDも朗読劇も人権へのそんな思いが形になったものです。年間活動である人権標語募集や講演会、広報紙づくりなどもそのように心掛けています。

DVDは人権教材として貸し出しています。コロナ禍で休止となった朗読劇は、また新しいメンバーで上演するつもりです。

いま、毎日のように報じられるロシアによるウクライナ侵攻の映像や写真に、簀子空襲の証言を重ね合わせると、最もおぞましい人権侵害が戦争だということを思い知らされます。もはや、遠い過去の出来事ではありません。語り継ぐことの責任を感じています。

（簀子人尊協相談役の上原美枝子さん、前事務局長の遠藤和子さん、事務局長の太田みゆきさんの話により構成）